

唯子

## いのち

ふと気づいたら目の前に、小さな焚き火があったのです。  
ゆらゆら踊る炎見て、私のことかと近づいた。

それからの日々は焚き火守り、  
火が消えぬよう薪をくべ、ときどき小さな火傷をし、離れてみればうら寒い。  
そろそろ薪も尽きようか。火の粉はどこまで飛んだやら。